

始



0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 60 1 2 3 4 5

305
83

地球を吊る

中山忠直詩集

305
83

地球を吊る
中山忠直詩集

中山忠直詩集

地球を弔ふ

書物展望社梓



中山忠直

序

余が詩作を始めたのは、明治四十三年、ハレー彗星が地球に衝突するとして、大騒ぎが演ぜられた頃からである。

十二三歳から自然科学に凝った余は、世の富貴榮達を冷視し、天文學者や桶の中の哲人を理想とした。だが一家の衣食の柱たることを要望され、かゝる自由は許さるべくもなかつた。

かくて俗的生活への反逆か、銀河に魂を洗ふの冷靜な胸にも、焰の如き熱情が爆發する。二十一歳の時、いよいよ社會改革に身を投じようと決心し、詩歌などを弄ぶべきでないとして、作り貯めたものを悉く火中した。だが幸ひ一友の親切により、彼に贈つた幾何が保存された。

大正十年の夏、たまたま友人と詩歌を談じ、懷舊の情に堪へず、舊知を歴訪して「自由の廢墟」を編み、次いで大正十三年に「火星」を刊し、之を最後と

して再び詩作から遠ざかった。若い頃は筆名を使つてゐたので、あの作者が余であるのを知る者が少い。

大觀すれば、宇宙の微塵、地球の上に蠢動する人類の運命など、どうしても良いてはないかと思ひつゝ、人類蠢動の渦中に生きては、動物的本能の故に人類を愛し、祖國を憂ひ、愛するが故に憎み、憂ふるが故に怒り、今猶ほ短き命をあらざるもがなの理想運動に捧げてゐる。

然も常に天邊の月を仰いては、千古人生の無常を感じ、人生改革に狂奔するの愚を自ら嘲つてゐる。自ら嘲り、尙ほ且つ愚戦を續くるは、人間性格の矛盾のためか、はた戦ひは無常忘却の酒杯たるためか。僅かに悟る、矛盾の却つて眞理なるを。時の去るや流水の如く、往年の詩境を回想して感慨無量である。

昭和十三年四月

著者

目次

地球を弔ふ	1
星座の主	9
天井の地圖	18
星	30
地球別離	37
山上展望	44
送別	49
ハレー彗星	55
暗黒	64
ダンヌンツィオ君	67
ボルガを溯りて	74



地球を吊る

地球を弔ふ

どれだけの時が
過ぎたかしら——？

長いあひだ
獨りぼつちで
冷たい墓の下に
眠つてゐて
すつかり

退屈になつた時
ふと記憶が胸を過ぎて

ぶらりと墓から
ぬけ出して来たのだ

どれだけの時が
過ぎたかしら——？

地球の模様が
すっかり變り果て、
見渡す限りは
もう一面の沙漠
噴火山はみな冷え黙し
都會の跡には
殿堂の礎石が亂れ

生きものゝ姿とては
一つも見當らぬ
見渡す限りの沙漠
地球が骸骨になつて
ころがつて居るのだ

どれだけの時が
過ぎたかしら——？

鳥の聲が繁みから洩れて
静かにこだましてゐた
栗鼠の森も
匂ひ高い花野も

優しい口笛の小川も
月夜にボートを浮べて
ギターを弾いた入江も
もう跡すら見えず
恐ろしい怒濤が
暗礁を噛んでゐた大洋が
大きな低地になつてゐる

どれだけの時が
過ぎたかしら——？

嗚呼あの太陽の
喘ぎ疲れた赤銅色！

太陽にも冷却が近づいたのか
それにあの虚空の黒さよ
空気が涸れ果て、
白雲の浮んでゐた青空は
いまは思ひ出のみとなり
まつ黒な空には
太陽と星とが
一時に輝いてゐる

どれだけの時が
過ぎたかしら——？

こゝではネロの暴虐も

トロイの戦ひもロシアの革命も
 ゲーテもワグネルも
 孔子もクレオパトラも
 一切の権力光榮争闘が
 きれいに忘れられてしまつた
 いや人類なんか
 かつてこの世に
 生きてゐたかといふ風に
 どれだけの時が
 過ぎたかしら——？
 壓制も反抗も

正義も自由も
 動亂も平和も
 ——人類の煩悶と苦闘が
 みんな見事に消えてしまつた
 そして見渡す限りの
 荒れ果てた沙漠！
 ほんとに
 ひつそりした世界だ
 どれだけの時が
 過ぎたかしら——？
 たゞ俺は見た

しつかりと俺は見とゞけた
人類の末路と
地球の終りをば

時は去り

時は過ぎた

あゝ、どれだけの時が

あれから過ぎたのか——？

——大正八年——

星座の主

僕は銀河の分水嶺に棲む

無窮にして不死なるものだ

僕は何時でも

古銅の椅子に腰かけて

宇宙の變遷をながめてゐる——

宇宙の過去帳も

現在の星座の開展も

幽玄な未來の死面をも

僕はみな知り抜いてゐるのだ

人間よ

僕はお前のために

宇宙の過去帳と

未来の豫言を語らうか

よくお前達は天文学者から

「火雲星」のことを聞くだらう

大きな大きな

熱い瓦斯のかたまりさ

そいつが星の第一期

お前達の棲む地球

それ等が属する太陽系も

元はその火雲星つて奴で

熱い瓦斯のかたまりが

ぐるぐる廻つてゐたのだよ

それがだんだん冷えて行き

美麗な茜の雲が凝結し

ところどころが切れて行き

地球や金星や火星や

天王星や海王星つて奴が

波紋のやうな軌道を作つたさ

その中心に集まつたかたまりが

薔薇と咲いてゐるあの太陽さ

あいつはまだ大きいので
熔鑪の海に似て
その表面は常に
火花と焰と稻妻の熱風で
凶日のやうに妖亂してゐる

お前達が夜な夜な
遺傳的な遊牧者の目つきで仰ぐ
蒼穹の神祕な恒星はみな
遠い處にある太陽だ

月といふ骸骨は
太陽から分家した地球の

そのまた分家なのだ
月は地球をめぐり
地球や火星や海王星は
また太陽の周囲で合唱し
そして太陽はまた
狼星座のずつと彼方の
望遠鏡なんかでは見えない
無窮の遠方の大火雲星を
ぐるぐる廻つてゐるんだ

そして皆が舞踊しながら
ぐるぐると大圓や小圓や
楕圓や拋物線や雙曲線で

宙返りしながら運行してゐる
 彗星つて鬚づらの老人は
 若い時の失戀で色情狂になり
 あの白い鬚を引きずりながら
 今だに戀を求めて狂ひまはつて
 憐れな代物さ
 あいつの軌道は拋物線でも
 雙曲線でもやつぱり
 太陽と同一の中心の火雲星を
 ぐるぐると廻つてゐるんだ
 銀河の分水嶺は

その大火雲星の絶頂だ
 僕はいつもその上に
 銅製の椅子を置いて
 宇宙の變遷をながめてゐるんだ
 人間や地球の
 未來の運命を話さうかね
 — あの月をごらん
 あの表面は一面の沙漠だよ
 生物が一匹もをらぬのだ
 地球の未來がみたければ
 月を仰いでみるがよい

人間つて奴は憐れな奴さ
もうしばらくすれば
みな滅びてしまふのだに
一生懸命になつて
眞理だとか正義だとかつて
騒いだり泣いたりしてゐるが
僕が遠い星座をしばらく眺めてゐて
ちよつと振りかへつて見る時には
もう滅びてゐるだらう
その時は眞赤な彗星を
お弔ひにやらうかな
どの星もどの星も

みな沙漠になつてゆく――
さうすると星のランプは
すつかり消え失せて
宇宙はすつかり暗くなる
もうちきに暗黒が来るのだが
その暗黒が来たら
その時こそ僕は
この銅製の椅子にねころんで
深い眠りをむさぼらう

天井の地圖

僕の八疊の書齋の天井に
天井いつぱいのべら棒な
大きな世界地圖が貼つてある
僕は讀書に疲れると
ごろりと疊の上にねころんで
その地圖を見あげるのだ
そして僕は支那よ印度よ
イタリーよイギリスよメキシコよ
アフリカよアメリカよボルネオよ

と叫びながら地圖の島々を
片つばしから散歩してまはるのだ
なんと愉快な書齋ぢやないか
僕は毎日かうして疊の上に
ごろりと大の字にねころんで
マルコポーロやコロンブスになる

——僕は見るゴビの沙漠を
蒙古人の天幕 喇嘛教の宮殿
バイカル湖からレナ河を下つて
北氷洋の方へ舟を急がせると
高山植物が一面に咲いてゐる草原に

馴鹿が遊び その地平の彼方の空に
極光が輝いてゐるではないか

僕はずつと南へ下つて来る
萬里の長城が月光のなかに
野や谷や山を越えて
夢のやうに淋しく連つてゐる

——僕はその長城の上を月光を浴び
静かに笛を吹いて歩いて行く
遠くて猿の啼くのが聞え
秋風がそゞろに身にしみて来る
笛の音は山の彼方へ消えてゆくとき

興亡盛衰の歴史を考へて
思はず僕はほろりとする

パミール高原に踏み入ると
人類發生の遺跡に太陽は輝き
晝は寂寞としても寂びわたり
鳥影すらも見えぬではないか
あゝ淋しい人類の始めの地よ
人類の滅ぶのは何時だらうか

ヒマラヤの峰から雪溪を辿り
ガンジス河の綠野に下りると
あゝ印度よ釋迦の生れし聖地よ

こゝはイギリスに奪はれ果て、
奴隸と象が鞭でたゞかれてゐる
ふと牢獄を覗くと石の床に
おゝガンジーが瘦せて坐つてゐる
印度よお前の獨立は何時だらう

静かなナイル河の水の面に
倒影うつすピラミッドよ
岸邊の椰子蔭に身を横たへて
夕暮に薰り高い葉巻をくゆらしてゐると
いつしか僕もクレオパトラ時代の
戯曲の人間になつてしまふ

アレキサンドリア港から船出して
傳説の淋しいキプロス島から
アテネの都に来て見ると
太古の廢墟に人影さびしく
多島海の潮風にスバルタ、テーベ
マケドニアのアレキサンダー大王
ホーマ、ソクラテス、プラトンの追憶が
こもごもに多感な胸に甦る

朝まだき細降る南歐の雨に濡れた
十二銅板を見てみると シーザーの幽霊が
血みどろの顔をうつぶけて通り過ぎた
あゝネロよシセロよカヴールよ

ダンテよボツカチオよダンヌンツイオよ
ミケランジェロよガリレオよ
追憶が追憶を追うて追憶に入つて行く

モナコで博奕に勝ち誇りつゝ
マルセイユからマルセイエーズの歌うたひつゝ
古い古いポルドーに葡萄酒をくめば
ヴェルレーヌが孤獨の涙を流し
不遇なナポレオンが隅で再擧に耽つてゐる
ユーゴーとロダンが散歩にやつて来て
僕に握手を求めてにこにこする

朝霧の絶え間にテームス河から

議事堂やロンドン塔をながめて
外套の襟をたてながら口笛を吹けば
クロンウエルが河蒸汽に乗つて
エリザベス女王に鱒曳にゆく
きつとこの邊をマルクスやクロボトキンなどの
亡命客が空腹を抱へてよぼついたらうな

ジブラルタルで魚を釣つてゐて
ふと晝寝をしてゐる間に
舟は貿易風に送られてアメリカへ著いた
おゝヤンキーがのさばる大陸よ
ワシントンの自由平等は亡びて
僞のデモクラシーが病菌の如く繁殖してゐる

そしてカリフォルニアから同胞が
蛆のやうに掃き出されてゐる

アメリカの地圖にふと目にとまると
むかむかと日本人の痼癩が起きて来る
あゝあの赤面を踏みにじつて
本當の自由平等を彼等に教へたい
アメリカは無限の富源を持ちながら
尙ほアジアに野心の魔手を差し延べる
あゝ何といふ強慾な野郎だ

地圖を見あげつゝ歴史を考へて見ると
蒙古は成吉思汗、ロシアはベテロ大帝

ペルシャはダリウス、マケドニアはアレキサンダー
ローマはシーザー、フランスはナポレオン
各々國民的な大英傑が四海を攻略し
オランダやスペインすら嘗て世界に雄飛し
今イギリスは太陽の領土に没せざるを誇る

あゝ然るに日本よ汝は僅かに豊太閤の
朝鮮征伐と日露戦争の光榮の碎片を持つ許り
敵に領土を侵された屈辱こそは持たぬが
嘗て地球上を闊歩した民族の誇を持つか
この小さな日本海すら日本の湖でないのだ
革命に乗じてロシアの沿海州を奪ふ獻策も
政府の腰ぬけが用ゐなかつたお蔭で

今はアメリカからこの侮辱だ
斷乎としてこの侮辱を雪ぎたいな

お、アメリカの鄰のメキシコよ
日本人が五百萬人も其處へ移住して
メキシコに歸化して軍人になり
日本と攻守同盟を結んでまさかの時に
南からアメリカに侵入するんだ
パナマ運河は爆彈の二三箇で十分だ
あゝかくて太平洋は日本の湖水だ
古武士の勇氣から日本の新しい未來は生れる
それにしても嗚呼それにしても

新しい友邦となるメキシコに行つて見たい
サボテンの繁るキャンプの詩の國に
石油の澤山出る革命の激しい男性の國に
日本人の血が澤山混つてゐるあの國に——
僕の心は中學生のやうにあこがれる
あゝ誰か僕といふこの熱血多感な國民詩人を
メキシコ人との握手のために送つてくれる
篤志家は世に居らぬだらうか
あゝ運命よ僕に恵みあれよ

星

あゝ星よ星よ
秋の晴れ夜に
またゝく星よ
お前を仰いで
宇宙のことを考へてみると
永遠が銀河のほとりから
僕の胸にやつてくる――
すると心がひつそりと
澄みとほつて来て

一切の邪念や情慾が
すつきりと淨まつてしまつて
鼓動が永遠と
調子をあはせてくる――

あゝ何といふこの胸の
沈んで冷たく静かなことだらう
――あゝこの胸の深い静けさよ
この氣持こそ
僕が感ずる最上の幸福だ

秋の深夜にまたゝく星よ
お前をみつめてゐると

俺の胸にありありと
人類の運命の姿が
映つてくるのだ

そして誰にも
隠してゐる弱い心が
涙ぐましくも甦つてきて
淋しい人類の運命が
いまさらに歎かれるのだ

俺は何時も強がりと言ひ
ひとかどの賢者ぶつてゐるが
そんなものが何にならう

星よ星よお前にだけは
俺は素直に隠さないのだ

人類つて何といふ
憐れなものだらう
眞理が自由が正義が光榮が
それは滅びてしまへば
それつきりな空虚なものだ

さう思ふと俺はすつかり
働くことがいやになつて
ぶらりと怠けて暮りたいのだ
そして夜になると

お前と話がしたいのだ

星よ星よお前だけは
この弱い本當の心を
理解してくれる
友達のやうに思はれるのだ

星を仰いでみると

すつかり俺は

太古の賢者になるのだ

涙ぐましくも

ギリシャの哲人になるのだ

彼等はみな

星を仰ぐことを楽しみにしてゐたが

俺もまた星を仰ぐためにのみ

生きてゆく人間でありたいものだ

あの無數に輝く星の中で

俺の運命の星はどれだらう

あの消えてしまひさうな

幽かな星が

俺の運命の星でなからうか

あゝ星を仰いで

このすつきりとした氣持を
いつまでも胸に懐いて
淋しく孤獨に生きてゆかうか
社會運動や革命のことなんか
すつかり止めて忘れてしまつて――

――一九二一年――

地球別離

さやうなら地球よ
二足獸の世界よ

僕は今 お前から離れて
遠く宇宙の彼方へ飛び去るのだ
獸類の文明にたまり兼ね
やつと造りあげたロケットで
憧憬の無窮へ飛んで行くのだ
二度と地球へ歸つて來るものか

でも 正直にさういふと俗衆が
このロケットを壊すかも知れぬので
僕は几帳面な科学者の態度で
地球と星の通路開拓と稱したさ

僕の悦びは輝く黒の喪服
でも民衆は決死の装束と賞讃し
學界と人類の先驅者だと感激し
見よ この僕といふ勇士をば
見送つてくれる旗 歡呼

僕は口笛を吹きながら
花環の群からヒマラヤとアルプスの

匂ひ高い地球の花を採り
ロケットの胴に結びつけて
身輕に機上の人となる

ロケットの酸素と食物は
後三十年は大丈夫で
僕はとても朗らかだ
あゝ早く早く地球の引力が
支配せぬ空間に飛んで行きたい――

地球の青い空氣層を突破すると
ロケットは宇宙のひろびろとした
眞空圏へ突入するのだ――すると

空氣の盡きた大空は眞黒で
太陽と月と星が一時に燦爛と輝いてゐる！

おゝ思つただけで もうたまらぬ
早く僕はその壯觀に見惚れたいのだ！

ひよつとするとこのロケットは

彗星の奴と道づれになるかも知れぬ

素的な話が澤山に聞かれよう

さやうなら地球よ——— 廣い大地よ

さやうなら地球よ——— 月の大きさの

さやうなら地球よ——— 星の大きさの

やがて それも見えなくなつて

盲目のロケットがぐんぐん進まう

或星は玻璃の陸地に虹の海

蜘蛛の巢で造つた家が建ち

月光で張つた窓の中から

眞理の精靈が合唱しつゝ

楽しさうに僕を迎へて呉よやう

或星はまだ年齢が若く

煮え立つてゐる渾沌の泥の海

まだ生物が顯はれて居らず

随つて神々もまだ産れて來ないが

やがて神話が始まらうとする

僕の肉體は何時しか變化してゐる
宇宙のXYZ線の放射で不可思議に
食物や空氣や熱が無くても
僕の魂は生き 肉體は動く
千年 萬年 億年 僕は不死だ

ロケットは疾くに不用だ
そんな機械はもう棄て、しまつて
僕は自在に宇宙を飛び廻つてゐる
光線と同じ速度で 自由な方向に
そして星の軌道さへ變更できるのだ

さやうなら人類よ 二足獸よ
さやうなら地球よ 太陽系よ
僕は今や不死にして無窮なるものだ

——存在不明——

山上展望

あゝ闊々とした
よい氣持だ

絶頂に立つて

下界を見下してみると――

麓の山々が低くうねり

その起伏につゞいて

緑の廣い平野

大川が糸のやうに光り

玩具のやうな都會

――そこに

城やら兵營やらが

ごたごた並んでゐる

あゝあれが

さつきまで俺が

住んでゐた世界か

そして其處に

名譽だとか權勢だとか

變なやくざな代物を

蛆蟲共が血眼になつて

追つてゐるのだ！

あゝ何といふ
からりとした氣持だ
俺はいま只一人
蒼穹に立つてゐるのだ――

上にはたゞ太陽が
らんらんと輝いてゐるばかり
あゝ天の偉大さよ
この地の弱小よ
そしてこの弱小な地上に
更に人類が蠢動してゐる
何といふ憐れさだ

太陽は徐々に動いて行く
あゝこの「時」の推移に
天が不變に残り
地上の蛆だけが
死んだり生れたりするのだ
威張つてゐても
蛆は蛆だ！

自然を征服するなどと
彼等はいつも豪語するが
見よ――蛆共は
地球の上を一步も
踏み出してをらぬのだ

あゝほんとに壮大な氣持だ
かうして絶頂に立つてみると
何だか俺の胸までが
天の悠久と合致して来るやうだ――

あゝこの絶頂に
永遠の雪のやうに
棲めないものだらうか
そして何時も
この闊々とした壮大な氣持に
ひたつて居たいものだ！

――大正四年――

送 別 (假託)

あゝこの樓のこの二階は
いつ來ても良い潮風だな
それにあの爽やかな波の音よ
晝間の疲れがすつきり洗はれて
頭がせいせいするではないか
それにこの新しい魚の味よ
たまらないではないか
――どれ酒をつがう

だがタラクナス・ダスよ

今宵は何時もとは違つた味で
この刺身を食ひ
酒を飲まねばならぬな
さう思ふと さすがにこの酒もにかい
明日はいよいよお別れだ
無事に暮してくれたまへよ

お、タラクナス・ダスよ

君は印度獨立運動の一柱石
幾度か死地をくゞつて働き
殿しいイギリス官憲の追捕から
やつと日本へ逃げて來たが
堪忍してくれよ日本もまた

君の住めない場所なのだ

イギリスの御機嫌を伺つて
腰ぬけの我が外務省の役人は
まるでイギリスの憲兵のやうに
君を捕へて渡さうとするのだ

それで君はまた明日こつそりと
横濱の棧橋からアメリカへ
亡命して行かねばならぬのだ
ダスよ ダスよ 堪忍してくれ
俺は日本人として冷汗が流れるのだ
何といふ腑甲斐のない日本だ

日本はアジアの盟主になつて
アジアを白色人種の手から
解放せねばならぬ使命があるのに
このさまだ！
君よ 黙つて許してくれたまへ
近い中には俺達青年の手で
日本を理想的な國に改革して
君のやうな志士の亡命國にするから
ダスよ 君はアメリカに行く
しかしアメリカもまた
君の安住できぬ處かも知れぬのだ

さう思ふと涙がこぼれる
鳥には巢 狐には穴
志士たるが故に君には家もない
しかし今日の君の身の上がまた
明日の俺の身の上でないといへようか

——さあ酒を一杯
君に始めて逢つたのもこの部屋
そして今宵君を送るのも同じ部屋
何といふ因縁の浅からぬことだ
萬感がこもごもに起るではないか
健かに暮してくれよ
タラクナス・ダスよ

君と飲むのもこれが最後
しかし命があつたらまた會はう
——さあ もう一杯

——大正十二年——

54

ハレー彗星

太陽が日本海に沈んで
軒々に夜の陰影が濃くなると
ハレー彗星の無気味な蒼白い光が
街の空に現はれる——
と 老人は二階の窓から首を出し
若者は道路に出て
みな一様に不安な顔をして
空を仰ぐのだ

——氣味の悪い光やな

55

| 　また戦争があるんぢやろ
 | 　疫病がはやる前兆やろ
 | 　もう一週間すると地球と衝突するがや
 | 　どうなるがやろ
 | 　地球が火事になるかも知れんぞ
 | 　そんなけにや人間が毒瓦斯で死ぬのやろ
 | 　南無阿彌陀佛　南無阿彌陀佛

妖兆だ　妖兆だ　地球の終りだ
 結婚したばかりの若夫婦
 老先の短い老人までが
 みんな短い生存をむさぼらうと
 不安な顔をしながら

日が暮れると空を仰いで
 歎息をしたり念佛を言ふ
 | 　あゝ彼等はなぜあんなに
 死ぬことが恐ろしいのだらうか
 僕はこの間から毎晩
 晩飯を食ふとすぐ天神橋を渡つて
 この向山の頂へのぼり
 この頂に立つて彗星を仰いで
 静かに黙想にふけるのだ
 | 　永遠が宇宙の底からやつて来て
 俺の魂をすつきりと冷靜にしてくれる
 嗚呼あの電燈の輝いてゐる街の人々は

お前の姿を見て妖兆だと騒ぐのに
僕のこの胸には何といふ
大冷静がひそんでゐることか

あゝハレー彗星よ

ほんとに壯大な姿だ

金澤城の森の上から

僕の頭を越して

河北潟の蘆を下に見て

能登半島の方へ

蒼穹一ぱいに横たはつて

長い光芒を引つばつてゐる――

ハレー彗星よ お前は

七十五年目に一廻り出来るやうな

軌道を循環してゐるといふが

この粟粒のやうな地球の軌道の

まあ七十五倍の大きさだ！

でもこの大宇宙の茫漠にくらぶれば

小さなものだ――然しお前を仰げば

さすがに胸が轟いてくる

お前が今度太陽系を訪ねる時

僕はお前を仰げるかしら！

あゝ天といふものは

何といふ廣漠無邊の空間だ

今更の如く魂が驚く――

あゝハレー彗星よ

お前の化物のやうな尾に乗つて
宇宙の片隅でも放浪できまいか
どんな珍奇な星が運行してゐて
變な生物が棲んでゐることか

――おゝ偉大なる放浪よ

――おゝ偉大なる放浪よ

僕は宇宙の未知の世界にあこがれる

僕は子供の時から

放浪が大好きなのだ

しかしこんな地球の上なんかを

放浪したつてつまらない

地球の上はみな大同小異

その光景はきまつてゐる

きつと地面があつてその上は空

地面は沙漠か山岳か森林か

それとも怒濤が逆巻いてゐる海だ

港や都會のごたごたと家の並んでゐる處には

小綺麗な女が男を待つてゐるばかり

狭つ苦しい地球の上を放浪して

毛色の變つた女を抱いて歩いたつて

始まらないぢやないか

それよか この丘の頂にねころんで

夜風に吹かれながら
口笛でも吹いてゐる方がよつ程ましだ

ハレー彗星よ

お前は彗星に似合はぬ常識家て

一定の軌道を守つてゐるが

そんな軌道なんか棄てゝしまつて

僕を乗せて氣まぐれに

氣まぐれな處を飛びまはつて

氣まぐれな時に他の星と衝突をしないか

それこそ本當のお前の生活だ

あゝ徐々に傾くハレー彗星よ

夜更けの山上に立つて
一人お前を仰いでゐると
僕の魂は宇宙の中にとけ入つてしまふ——
何といふ人類の弱小さだ
お前の一循環が人間の一生だ
お前が地球を訪ねてから
僕の心は夜々
お前を仰いで緊張してゐるが
もうしばらくするとお前はまた
太陽系を去つて
僕等の視界から離れてしまふのか
一寸淋しい氣がするな

——大正三年——

暗 黒

われは闇を驅りゆく叫喚の影だ
方位もわからぬ果しない闇を
たゞ憤怒の叫喚をあげて驅ける影だ

暗黒をわれ過ぎゆくところ
八方より潮の如く叫喚が罵りどよめく
銅の聲 鐵の聲 岩の聲

あゝ彼等叫喚も起きて驅け出すか
闇の底を右に左に前に後に

叫喚は錯綜して馳せちがふ――

われは闇を驅けゆく叫喚の影だ
理想をも信念をも失つた叫喚の影だ
たゞ憤怒を叫んで闇をさ迷ふ――

叫喚は馳せちがひ衝突し殺し合ふ
されど何物も見えぬ暗黒 たゞ暗黒
憤怒と罵詈と呻吟のみ闇をどよもす――

大地は苦悶して地軸より震動し
嵐は狂亂して闇を渦巻く
あゝ銅の聲 鐵の聲 岩の聲

われは闇を驅くる叫喚の影だ
理想と信仰を失つた絶望の叫喚だ
目標なき憤怒に燃ゆる悪霊だ

あゝ地は呻いて震動す

嵐は砂礫を飛ばして闇を走る

あゝ銅の聲 鐵の聲 岩の叫び――

――五三四年――

ダンヌンツイオ君

イタリーの與太ダンヌンツイオよ

貴様は飛行機にぶち乗つて

俺の國へ遊びに来るさうだが

毎日俺は手を舉げて待つてゐるぞ

空の彼方にプロペラの音がする晴れた日は

ともすると俺は外へ出て彼方を望み

「おらいダンヌンツイオ」と叫んで見るのだ

俺の根性そつくりのダンヌンツイオよ

貴様がやつて来たならば

借金を質に置いて御馳走をするよ
灘の生一本に名物の藝者ガールでさ
晝は晝を恣にし夜は夜を恣にしよう

胸を叩いて話したいものだ

パイロン君が死んでから

世界の詩人の値うちは下つたな

詩人つて奴は神経衰弱の代名詞になつた

多分 貴様の國の多くの詩人もさうだらう

悲しい事には俺の國もさうだよ

それを貴様は見ん事回復してくれた

有難う ダンヌンツイオ

イタリーの我黨の偉大な與太！

パイロン君がギリシャの獨立戦に
單身飛び出したやうな話は
もう物語になつてしまつたと思つてゐたら
こんどは貴様が飛び出してくれた
飛行機に乗つて三軍を叱咤し
ヒューメの占領と來てゐる 愉快だ
何とこの俺が踊つて悦んだことか
ダンヌンツイオ萬歳つて叫んでな
獨りで祝杯をあげたもんだぞ
そして貴様を書いた小説や詩を
改めてもう一度読みかへしたぞ

イギリスやアメリカに遠慮してゐる
 貴様の國の腰ぬけ政府の命令を
 糞か屁のやうに心得て
 敢然としてヒューメを占領した勇氣よ
 共鳴するぞ そのロマンチックな心に
 貴様だ俺だ 俺だ貴様だ
 貴様を思ふと胸が轟く

日本のひよつとこ詩人共は
 貴様がヒューメを占領したのを見て
 舊式な愛國心で御座るとひやかしたり
 詩人の爲すべき事でないとお濟ましたが

なあ君 あいつ等の負け惜しみなんだよ
 氣にかけるな なあダンヌンツイオ
 俺がついてゐらあ

貴様がヒューメを占領しなかつたら
 それこそ貴様はそこの芥文士と
 區別のつかないやくざな代物さ
 貴様がお伽噺の英雄の主人公になつたればこそ
 本當に男の中の男 詩人の中の詩人なんだ
 貴様の氣持が本當に良く分るよ
 振れ 振れ ガブリエレ・ダンヌンツイオ

やい好漢ダンヌンツイオよ

貴様はイタリーの國粹主義でやつたが
 俺は日本の國粹主義でやるんだよ
 貴様の國にも翻譯思想家が澤山ある模様だが
 俺の國にも御連中が毎日吠えてゐるよ
 何も出来ぬ癖に聲だけ黄色く立てゝね
 俺もやるよ見てゐてくれたまへ

世界の詩人に氣を吐いてくれた詩人よ
 やいガブリエレ・ダンヌンツイオよ
 櫻の花咲くこの日本に
 やつて来い早く飛行機で――

夜は夜で踊り 晝は晝で飲まう

日本娘は友禪の裾を翻へし
 イタリー語に似た日本語の母韻で
 君に酒をついでくれるよ

ダンヌンツイオ君 早く来い 待つてるぞ
 振れ 振れ ガブリエレ・ダンヌンツイオ

六三三

ボルガを溯りて

——ロシアに革命が成功して亡命客が母國へ歸り得た時はどんなに悦しかつたらうか。この時は都へ歸るロシアの志士の氣持を、ロシアの志士の氣持になつて唄つたものである。余は共產主義に反對だが、戰士としての胸に共通感がある——

懐かしきボルガ河の水の音よ
僕は生きて再びお前の上を
溯り得ようとは思はなかつた
あゝ懐かしき波の音よ
この音はむかし僕が亡命した時に
聞いたのとやはり同じ音だ
だが今聞くのと昔聞いたのとは

あゝ何といふ氣持のひどい變りやうだらう
昔僕は船底の積荷の間にかくれて
波の音とスクルールの響を聞きながら
都に残した戀人や同志を憶うて
胸の底から涙がこぼれたものだ

そのお前の上を
僕は再びのぼつてゆく——
革命が成功した都へと溯つてゆく
靜かに甲板に佇んでゐると
艦の空に満月がかゝつて
スクルールに亂された波が銀色に光り
岸の黒い森が後へ後へと走つて去る

——お、あの森蔭の石牢の塔！
あれがブレイブを暗殺したサゾノフが
銃殺された獄屋なのだ
サゾノフよ——僕は胸が一ばいだ
君のやうな尊い犠牲者のおかばで
僕達は再びボルガを溯り得るのだ
あ、——モスクバの停車場で
煙草賣に化けてゐて
ブレイブに爆弾を投げた時の
あの壯絶な光景を思ひ出す——
君は自ら投げた爆弾に深傷を負うて

敷石の上に倒れてしまつた

それから僕は君を棄て、逃げた
そしてこのボルガを下つて
コーカサスの同志の許にかくれた
あれからも十幾年を経たらうか
若かつた僕の髪には
もう白髪がまじつてゐる
でもあの時の事を思ふと胸が轟く

ボルガの水は渦巻いて月光の方へ
深くよどみつゝ流れて去る
革命が成功して都へ歸るのだに

何といふ胸の沈んで悲しいことだらう

——死刑や追放の同志の幽霊が

森の彼方から懐かしげにやつて来る——

ペテルスブルグの冬宮のあたりを

よく手を携へて散歩した

ナターシャは今どうしてゐるだらうか

ほんとに熱情的な革命婦人だつたが

いま頃は誰か同志の妻になつて

子供の五六人も持つてゐるだらうな

早くその子供達を抱いてやりたい

故郷に残した父や母はひよつとしたら

もうこの世にはゐないかも知れぬ

暮れてゆく静かな窓邊に子守唄をうたひ

柔かい乳房を含ませてくれた母や

雪の中を櫓を曳いて

教會へ僕を連れて行つてくれた父は

もう再び僕を抱いてくれぬのではないか

——人々はもう寝てしまつてゐる

眼覚めてゐるものは船燈と僕だけだ

だが僕はどうしてこの夜を眠れようか

僕は月光に碎くる川波の音を聞きながら

死んだやうな静寂の中に佇んで

ありつただけの追想にふけりたいのだ

人は生れていづくに行くか僕は知らぬ
しかし何時も變らぬはボルガの音だ
闇の底をとこしへに流るゝ水の音だ
おゝ渦巻き流るゝボルガの水よ
お前は昔から僕のやうな人間を
幾度乗せて流れたことだらうか
更けてゆくおほ空の月よ
お前は人類が地上に現はれてから
數へきれぬ興亡盛衰の悲壯劇を
いつも静かに見おろしてゐるのだ
人の世はかくして昔から未來まで

同じ芝居をくりかへしてゆくのか――
懐かしきボルガ河の波の音よ
僕はなんだか自分が自分で
歴史のなかにゐる人間のやうな氣がする
懐かしきボルガ河の波の音よ
更に深く澄みとほつて響いてくれ
僕はいま舊い戀人や友人の許に歸つてゆくのだ

――大正十一年――

物	納	限 定 二 百 冊
展	本	
望	・	
社	書	



昭和十三年五月一日印刷（皇曆二五九八年、西曆一九三八年）
昭和十三年五月五日發行

定 價 金 七 圓

著 者 中 山 忠 直

發 行 者 齋 藤 昌 三

印 刷 者 土 井 儀 一 郎

發 賣 所 書 物 展 望 社

取 次 店

東京市京橋區區役所一ノ六
電話 東京 〇八七七
東京市京橋區區役所一ノ七
電話 東京 六〇八〇
東京市京橋區區役所一ノ八
電話 東京 〇八九七
東京市京橋區區役所一ノ九
電話 東京 〇八九七
東京市京橋區區役所一ノ一〇
電話 東京 〇八九七

305
83

終